

の友達をどびどびに数えること)でなくて、お友達順番に数える方がいいわね。たいへんだものね。それでもいいけど。」曲に合わせて歌う。T「ひとりのお机のお友達十人いた?」C「この机十人。」T「じゃちょうどよかったでしょう。」C「八人。」T「たりなかったかたはお友達のお机の方も数えましょうね、じゃもう一回。」曲に合わせて歌う。

30 「ちゃんと数えられました? あらそう。」T「今度はね、

みんなの知らないお歌。○ちゃん今度違うお歌をするからお手々たいて下さい。」子ども手をたたきつつ聞く。T「ああ

31 そうね。いろんな型でゆっくりたいた方もあるし、タンタンタンて方もある。これはあそこに書いておいたんですけれど、お帰りが近いから明日また教えてあげるわね。○ちゃん、×ちゃん、お嬢さんかしら。水筒をさげて坂道かけあが

るお歌なの。じゃおせなまっすぐにしましょうね。」子ども同志で雑談している机にT「ここは何か御用があるらしく、お話してるわ。おせなかのぼして、背が高くなるようにして下さい。こんなに曲げていると、早くおじいさんやおばあさんになっちゃうものね。ごもんの所気をつけてちょうだいね。ちゃーって走ったりお友達やおむかえの方と離れないように。お当番の方お願いします。」子ども達は部屋への入口の前

34 に並び玄関の方に行き、一人ずつあいさつをして帰る。

× × × ×

## 保育者の立場

堀合文子

私共は幼児と毎日生活している。一しょに遊んだり、笑ったり、時にはおこったり、困ったり。常にこれの繰り返しである。家庭の母親のひざから幼稚園というわくの社会へとびこんで来た幼児を、いかに迎え、いかに生活し、経験させて小学校へおくり出したらよいか。

これは誰しも考え、研究し、悩んでいる事であり、深さは深く、むずかしい。

相手が幼児であることと、指導が教科でないことがより私共をむずかしく、悩ましてくれる。また相手が幼児のため、いかにようにも過ごせる。

しかし私共はいろいろあるその指導の中でも、将来のある幼児のためには、最良の適切なる指導を与えてあげねばならないと思う。

時代が進むにつれて子どもたちもいろいろの面で発達がいちじるしい。幼児の教育も常に教師が研究し、幼児をみつめ、時代、その時に適切な指導がのぞましいが、幼児期はやはり幼児期にすべき経験があり、小学校の縮小のような経験はさけるべきではないだろうか。

また、幼稚園教師に課せられたことは、幼児期について以上のような必要性も、心理的見解なども、すべて理論は理解しているが、いざ幼児を前にし幼児と生活するとまるで小学校の縮小にすぎない場合が多々ある。幼児は教師の技法にぶつかって生活しているのであるから、たとえ理論は立派でも幼児にとっては迷惑な先生となってしまう。その点幼児と生活する教師は、実際の指導ということを大いに研究し、よりよい指導の技術を研究しなければならぬ。

### ○遊びの必要性

幼児の生活は遊びである。おとなは課業生活をしているが、幼児はおとなのそれが即ち遊びなので、幼児の全生活である。

その遊びの解釈にもいろいろあるだろうが、生後知識を得ると共に乳幼児、幼児と遊びが発展してくる。幼児は遊びを経験しているうちに、その中からいろいろ経験もし、知識的にも発達していることは言うまでもない。

幼稚園も団体生活でありながら、幼児にとっては家庭の延長である。家庭は遊ぶところ、幼稚園は何か取得するところ“ではない。勿論、家庭で取得できない面を幼稚園で経験するのだが、幼児の遊びは両方の環境をおおっているものである。

三才ともなると友だちを要求する。幼児はたくさん友だちのいる幼稚園へ行ってあそぼうと幼稚園へいさんでやってくる。

しかし、そこに待ちかまえた教師は、幼児を教育しよい子に育て上げようと、手ぐすねひいて待っている、いろいろと教師

の計画を与え一日を過ごして帰す。幼児は不満足である。幼児の経験しようという自発性は皆つまれ、幼稚園へゆけば教師の言のままに行動しなければ行動できぬ、気力の乏しい幼児が出来上ってしまう。

が、教育の場である幼稚園では、適切なる経験を与えることにより将来の基盤をつくらねばならない。幼児が友だちと遊んでいる時の、幼児の顔のかがやき、目のかがやきはすばらしい。そのかがやきをもってすべての経験がなされるよう教師はその指導面で工夫したいものだ。

幼児の全生活である“遊び”をさまたげない教師の指導が当然工夫研究されてよいと思う。

### ○幼児と共に遊べ

幼稚園の教師は、幼児と共に遊べる人でなければいけない。幼児に自由に遊ばせ、常に監督的、傍観的位置にいるばかりでは疑問である。

入園当初の幼児や、三才の幼児は教師が先に立って遊びを誘導し、四才、五才となり、友だち同志のあそびも活潑になると、教師は幼児の同年令の友だちとなって一しょに遊びに入れてもらうようになる。このように年令によって教師の立場もかえてゆかねばならない。

教師が仲介になって幼児の友だち関係を豊かにし、幼児の遊びを發展させたり、その遊びの中でその機会をとらえてその時々、その人に適切な指導をしていく。

幼児の遊びも、指導なくとも、年令がくれば友だちと遊べるよ

うにもなるし、遊びもある程度発展はしていく。しかしそれでは幼稚園の場に幼児をおく必要もなければ、教師の責任もなくなる。

同じ「ままごと遊び」も教師は日常観察しながら、また幼児と遊びながら、必要性を指導したり、生活指導の面があればこれも指導したり、遊びが常に同じ場合であまり発展しない時は教師がちょっとヒントを与えることにより、一歩すすんだ段階の遊びに入っていく。そしてその遊びも幼児がそこから創造性をもって発展していく。

友だち同志のあそびのまだ出来ない年令は、教師が遊びを率先してやり、遊びを提供する。このくりかえしをしていくうちに、教師と遊んでもそこには友だちがいて自然と友だち関係も生まみだされていく。個人差はあるが、友だちとの遊びが出来はじめたら機をみて教師はその遊びをぬけ幼児の友だち関係をそっと育てていく。

このようにしていくうちに、問題児が出てきても、教師はその問題に対してぶつかってゆける。

教師が遊ぶことにより、幼児たちの友だちの遊びがつまらなくなったり、遊びが中断されたりするのは教師が反省しなくてはならない。このように遊びは幼児にとっても生活であり大切のように、教師にとっても指導する上に大切なものである。

○教師が遊ぶことにより幼児に直接ぶつかるといふようになり、親密感が深まり、教師・幼児ともに安定感と信頼感と愛情がおこる。これではじめてよい指導がなされるので、教師と幼児の間に隔があつては上への指導はできても真の指導はできない。それで

入園当初は経験させることよりもまず幼児と遊ぶことが、その後の幼児の生活をよりよくする上の基となるので、教師は、何ヶ月も遊びを主題とする日を持つ。

○教師は、問題のある幼児とは特別積極的に遊ぶ。前述のように組の幼児の中にはその中にこぼれも出てとりのこされる幼児が出る。

その時はもう幼児は友だちとの遊びも出来てくるから、その問題の幼児と特別遊び、友だちの所へ誘導したり、何日かをかけて問題をとりぞくよう努力する。

○教師は幼児が友だち同志のあそびができてくると教師の計画をその中に入れていくことを考える。これは後の機会にくわしく話すが、このようにして幼児の幼稚園生活がすすめられていく。

年令によりその遊びの種類もちがうように教師の指導も勿論ちがう。五才になり遊びができてくるから教師は遊ばなくてよいというわけにはいかない。その種類指導はちがつても、教師は常に幼児と遊び、また遊べる教師でなければいけない。

幼児を幼児として生々と生活させないで、ある幼稚園のわくにに入れて生活させるのも一利あるかもしれないが、やはりお魚は金魚鉢に入れねばならないように、幼児は幼児の生活の中へ泳がしてやりたいものである。

そして教師が計画を幼児の遊びの中へ入れたり、幼児の遊びから取材し発展させたりして日々の生活がはじまっていく。

幼児の遊びは入園当初も日常も大切なことで、幼児にも教師にも、その必要性は重要な位置をしめる。